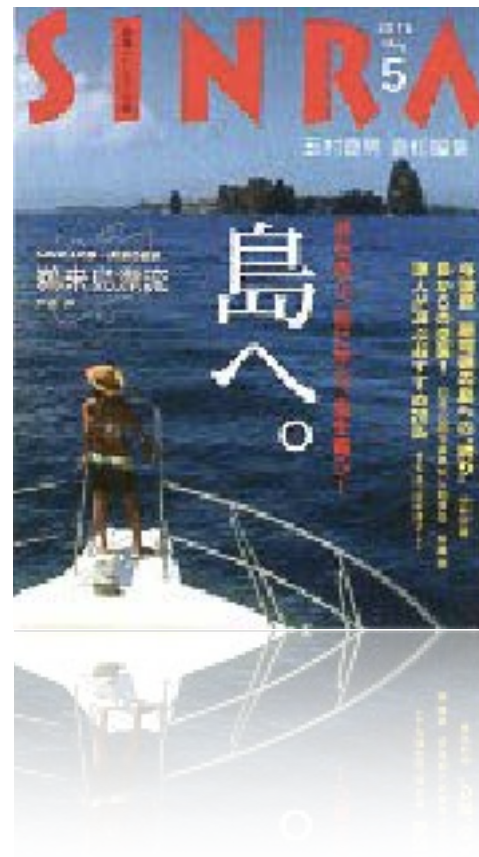


# シンラの旅-5 「黒潮の孤島」 鶴来島漂流



エッセイ  
芦原伸



# SINRA

# CONTENTS

各見出しリンク

▶ **SINRA-1 2014.9**  
「小豆島」 オリーブカントリー

▶ **SINRA-2 2014.11**  
「秋田」 マタギの里へ

▶ **SINRA-3 2015.1**  
「富岡」 富岡製糸場の歩き方

▶ **SINRA-4 2015.3**  
「北海道」 北海道ワイン紀行

▶ **SINRA-5 2015.5**  
「小笠原」 黒潮の孤島鶴来島漂流

▶ **SINRA-6 2015.7**  
「大台ヶ原」 熊野古道をいく

▶ **SINRA-7 2015.9**  
「信州木曾谷」 森林鉄道が消えた日

▶ **SINRA-8 2015.11**  
「霊峰月山」 死と再生の小宇宙

▶ **SINRA-9 2016.1**  
「丹後」 古代王国と、絹をめぐる道

▶ **SINRA-10 2015.3**  
「秩父」 絶滅危惧種再生へ、開ける道

▶ **SINRA-11 2016.5**  
「佐賀」 大海を越えた胡蝶の夢

▶ **SINRA-12 2016.7**  
「津軽」 ブラキストン幻の海

▶ **SINRA-13 2016.9**  
「五島列島」 クジラたちの海

▶ **SINRA-14 2016.11**  
「飯田」 天空の里、遠山郷

▶ **SINRA-15 2017.1**  
「北海道」 ジンギスカンをめぐる冒険

▶ **SINRA-16 2017.3**  
「宮城県」 猫たちの聖地

▶ **SINRA-17 2017.5**  
「京都」 神が授けた、いのちの水

▶ **SINRA-18 2017.7**  
「熊楠」 の森をめぐる冒険

▶ **SINRA-19 2017.9**  
「カナダ」 極北の大地に生命が燃える

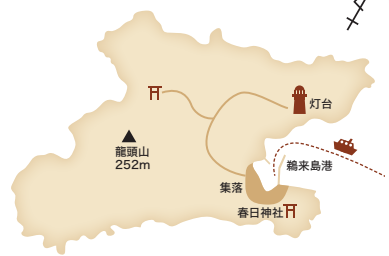
▶ **SINRA-20 2017.11**  
「宮崎」 神楽仮面の謎を探る

ご購入

 Fujisan.co.jp  
雑誌がオンライン書店

ご購入

 amazon.co.jp  
プライム



鵜来島の全景

灯台から望む集落の全景。島で人が住んでいるのは港近辺だけで、それ以外はすべて野山。中央右手の白い大きな建物は旧鵜来島小・中学校

朝7時、宿毛市片島港から定期船「すくも」に乗ること約50分。薄暗い空の奥に隠れていた鵜来島が日の出とともにその姿を現した



# 黒潮の孤島 鵜来島漂流

高知県西南端、宿毛湾の沖合に浮かぶ離島、鵜来島。島民22人、平均年齢76歳。自転車や自動車も1台もない。ゆったりとした時間が流れる島の暮らしに迫る。

文 芦原伸（ノンフィクション作家）  
協力／高知県、高知県観光コンベンション協会  
撮影／戸川 寛



## このままでは無人島になる

ほどなく島が見えてきた。奇怪な恐竜あるいは巨大な亀が海上に横たわっているかのようで、水平線から頭部と背が浮き出ている。見るからに絶海の孤島だ。定期船「すくも」（82トン）はその頭部あたりをめざし、波をかき分ける。

鵜来島——高知県の最西端、宿毛湾の沖合23・3キロメートルに浮かぶ孤島だ。1日わずか2便、所要50分。訪れるのは、大物グレ狙いの釣り人だけだという。一步、島に足を踏み入れて驚く。石垣が築かれ、民家が密集する。あたかも城塞のようだ。周囲6キ



平地は港から旧鵜来島小学校までの数百mの道だけ。そこから先の移動は急な石段の登り降りとなる

ロメートルと聞いていたが、集落は港付近にしかなく、あとは切り立つ崖が続くばかりだ。石段の続く急坂が港から四方に延び、平地はない。ここには1台の自動車も自転車すらも存在しない。急坂の石段に沿って、一番上にある民宿まで数百段、荷物を背負い登らねばならない。離島に着いた瞬間から「漂流気分」ははじまった。

観光的な見どころは一切ない。神社、寺、昔の運動場、灯台くらいが見学コースだ。島で2番目に若い55歳の宮本五さんが案内に立った。宮本さんは島民から「あっちゃん」と呼ばれる人気者だ。背筋が

伸び、二の腕は太いが、優しそうな目が笑っている。もともと漁師だったが、島を出て長らく大阪に暮らしていた。島の区長から頼まれ、「地域おこし協力隊」の一員として島に帰ってきた。「地域おこし協力隊」は2009（平成21）年からはじめた総務省の人材派遣制度で、派遣後、地域で職を得て定住してもらうことを目的とする。

あっちゃんの仕事は、民宿の手伝いや宿毛から届く荷物や郵便物の配達、アワビ養殖の実験など。まれにこうした取材対応もある。「国から月に12万円の支給があるんや」

島で現金が必要なのはたばこ、酒代だけ。1日3000円あれば暮らせる、という。まずは春日神社へ。注連縄のかかる立派な石の鳥居が立ち、境内はきれいに清掃されていたが、人の気配はない。本祭の秋祭りには多くの島民が帰省し、神輿をかつぐ。鵜来島は江戸時代まで伊予宇和島藩領だった。明治になり、廃藩置県以降、高知県に編入されたという複雑な歴史がある。祭りは旧藩の気風を残すといわれ、神輿、樽、牛鬼の3つの山車が島内を練り歩く。神社から集落と港を一望できた。数えると50軒くらいの民家が急坂にへばりつくように並んでいる



港で魚をさばくあっちゃんと、獲物の臭いを嗅ぎつけてやってきた猫。  
腹を空かせて岸壁についた漁船に上がりこんでくることもある



が、その3分の2は空き家らしい。人口はわずか22人。平均年齢は76歳。女性が8割、小・中学校は10年前に廃校となり、子供はひとりもいない。日本の近未来の縮図のようだ。

集落の間道を歩いてふたたび驚く。どの家にも小さな畑があるが、その畑はすべてフェンスがしつらえてある。

「イノシシだがな」

あっちゃんと言う。

イノシシはこの20年来増え続け、畑を荒し、残飯を求めて、無人の民家の板壁を突き破り、侵入するようになった。老人ばかりの島でイノシシは脅威、天敵である。

小さな畑ではダイコン、タマネギが細々と栽培されていた。

「昔は天まで段々畑やったが」

石段を作り、畑を囲んだ。30年経った今、荒れ放題で灌木が茂り、段々畑は消えている。

昭和40年代、島には約400人の男女が住み、カツオの一本釣り漁が盛んだった。10人を超える子だくさんの家族もあった。しかし、50年代の終わりから漁業が不振となり、若者たちは島を出た。

あっちゃんもそのひとりだった。

中学を卒業してすぐにカツオ船に乗った。8年間漁師として働くが、船主の経営が苦しくなり、島の船はカツオ漁をやめた。餌とす

る生きたイワシや燃料が上がったためだった。給料は歩合制で、船主が7、乗組員が3の割合で漁獲高を分けた。船主は船の購入、維持管理、燃料、餌代をもつ。乗組員は16人いた。

「昭和50年代やね。10代で、年収200万円くらいもうた。半年は漁がなく、遊びやった」

月給にすると約16万円。当時の

大卒初任給が10万円くらいやったから、乗組員はよかったが船主は経営難に陥った。

「カツオ漁全盛期にはこの港にも商店が4軒あった。宿毛では片島港から中心街までスナック、クラブ、バー、居酒屋が並んでおって歩いてハンゴできたんや」

前夜、宿毛に泊ったが、今はその辺りは真っ暗である。島の若者が都会のサラリーマンの2倍くらいの金を稼ぎ、酒と女に身をよつした。灯りのない繁華街に今もシヨール劇場が残っているのは、当時の記憶を留めているのだろうか？

23歳で島を離れ、大阪へ。塗装店に勤務した。1年勤めて島に帰ってきたら、

## かつてカツオ漁で栄えた島も、このままでは無人島になる

「カツオ漁船は1隻もおらんかった」

ふたたび島を出て、以来大阪で30年を暮らした。

3年前、大阪から

帰ったが、島の衰退ぶりを見て、

「自分は浦島太郎か、島のももが、

と思ったよ」

「このままでは無人島になる」と心配している。

島の旧運動場は山の中腹の給水塔の脇にあった。かつては陸上競技やソフトボール大会が催されたというが、もはや灌木と雑草に覆われて白昼夢のようである。

灯台からは豊後水道、太平洋の海が足元から広がる。かつてはこの海を戦艦大和が南方めざして出陣した。島は宿毛湾を守る海軍の重要基地で、戦時中は小さな島に兵士が200名も駐屯していたという。

入江に戻った。明るく透明な鵜来島の湾内にはコバルトスズメ、ハタタテダイの熱帯魚が時を忘れ



笑顔で島を案内してくれたあっちゃん

て群れ泳いでいた。

### 「渡り漁師」みたいな人生

出口繁男を紹介せねばなるまい。島民からは「繁ニイ」と呼ばれ、頼りになる兄貴分として一目置かれていた。小柄ながらがっしりとした体格。日焼けした顔に黒髪が光り、65歳という年齢を感じさせない。あっちゃんと同じく彼も3年前に島にUターンした。

1949（昭和24）年、船頭（カツオ船の漁労長）の家に6人兄弟の長男として生まれた。島の中学を卒業して、宿毛市の高校へ。さらに大阪の大学へ進んだ。次男、三男は漁師になったが、島出身の大卒は繁ニイだけだ。

東京に憧れ、広告代理店の名門・内藤一水社に新卒で入社。同時に3年間日ソ学院の夜間語学教室に通った。

「高校時代、ヘルマン・ヘッセが

好きでよく読んでいたんです。そのあとがきに、「ヘッセの世界を極めるならドストエフスキーを読め」と書かれてあったんです」

さっそく『罪と罰』を読んだ。殺人と純愛が混在する主人公ラスコーリニコフの悩める魂が痛いほどに理解できた。時は70年安保の時代である。国家権力が押しつける既成概念を打ち破ろうと思った。

「原文で読みたい、と思ったのがロシア語をはじめた動機でした」

広告営業は身に合わず、あっさり会社を辞め、しばらくフリーターの暮らしを続けた。

その後、水産庁の北洋サケ・マス取締船に乗船し、通訳として活躍。日本漁船や日本の領海内に入るソ連船を取り締まった。さらに商業捕鯨の監視のため、日ソの捕

鯨母船の通訳官として、スペイン領カナリア諸島ラス・パルマスや横須賀港から4度も南氷洋へと赴いた。その後も大洋漁業（現・マルハ）の仕事で3年続けてロシア船に乗り込み、北洋の海で働いたこともある。さらに水産関連の商社や日鮮連で働き、シアトルに1年、モスクワでは1年の語学留学も体験した。

七つの海を渡った。

外国の名もない港の片隅で、満潮の夕暮れなど潮の匂いを感じた時、あるいは冬の大会の雑踏のなかで、北西風が吹きはじめると、故郷の鵜来島を思った。



「ミニ」（昼食会）のため、旧鵜来島小学校の給食室で食事の準備をする女性たち



上／家の畑で野菜を育てる島民。鵜来島では海から吹く潮風のおかげで、柔らかく甘いタマネギを育てることができる  
下／春日神社の狛犬（こまいぬ）。約30年前、祭りで島民たちが肩や鼻の穴を太くするなど落書きしたが「可愛いから」とそのままにされている



甘辛く、濃い目の味にするのが  
鵜来島「漁師料理」のスタイル

揚げ物だけどサッパリ  
食感はサクッ、フワッ



冬の食卓には  
欠かせない！

これが鵜来島流！  
**島ごはん**

漁業の島・鵜来島では、海の幸をふんだんに使った料理が堪能できる。そのパリエーションは豊富で、素材も新鮮、まさに贅沢なごちそうだ。鵜来島流の“島ごはん”を一挙紹介！

野菜との相性抜群  
**タビエビの水炊き鍋**

標準和名ウチワエビは、高知県では履き物のわらじや足袋に似ていることから通称「タビエビ」と呼ばれる。伊勢エビよりも甘みがあり、濃厚な味が特徴。鍋にすると美味。

素材の味をそのままお届け  
**クロニナの塩ゆで**

クロニナは干潮時に磯にいる小さな巻貝の総称で、地方によっては「したたか貝」とも呼ばれる。塩ゆでにしたものを爪楊枝などでつまむとビールなどによく合い、病みつきに。



ポイントは“2度揚げ”  
**イサキの南蛮漬け**

塩コショウを振り、片栗粉をまんべんなくまぶして油で2度揚げ。表面はカラッとして身はふかふか。味つけは三杯酢と砂糖、隠し味にポン酢を。タマネギを添えて召し上がり！

島の伝統料理  
**めのり飯**

12月～2月の寒い時期に鵜来島の磯で採れる「めのり」（岩のり）を佃煮にして白ごはんに乗せた飯。「天ぷら」（魚のすり身の鳥言葉）も一緒にまぜると、食感が増しておいしい。

鵜来島の島民なら  
誰もが知っている



お酒がよく進む！  
呑べえのつまみ



島では定番中の定番  
**キハダのアラ煮**

魚を下ろした後に残ったアラを醤油、ザラメ、酒で煮つけに。水の代わりに酒を使うと、甘みにコクが出て照りが増す。“しっかり濃い味にする”鵜来島料理を象徴する一品。

魚は余さず使う。  
最後までうまい！

海の幸といえ  
やはり刺身盛り！

- キハダ(ピンタ)
- グレ(メジナ)
- イサキ
- シロハゲ



ハゲのキモ

鵜来島流・最上のおもてなし  
**大皿宿毛尽くし**

島の漁師が釣った新鮮な魚をその日のうちにざばいて刺身4点盛り。ハゲ（カワハギ）のキモ（内蔵）を少し醤油に溶かして食べるのが通な食べ方。まるやかな味が楽しめる。



島ごはんならここ！ 民宿 <sup>あかり</sup> しまの灯

鵜来島港から石段を登って約3分、頂上付近に建つ一軒家の民宿。このページで紹介した料理はすべて「しまの灯」のもの。1泊2食付きだが、希望すれば500円で昼食を付けられる(弁当も可能)。高台にあるため、集落や海を一望することができる。夜はロマンチックに星空を見上げるのもいいが、島の外灯が照らす幻想的な風景をぼんやりと眺めるのもいい。ダイバーや釣り人だけでなく、ゆったりと「島時間」を過ごしたい人におすすめの宿。

● 宿毛市沖の島町鵜来島37 ● 0880-69-1714 ● 6,800円 (1泊2食付)